

第65回(2021年度)日本アメリカ文学会 関西支部大会フォーラム(要旨)

アメリカ文学における触覚的身体の変容——「接触」と「接続」をめぐって

司会・講師	高村 峰生 (関西学院大学)
講師	小林 久美子 (京都大学)
講師	秋元 孝文 (甲南大学)
講師	矢倉 喬士 (西南学院大学)

2020-21年のコロナ禍を通じて、感染症対策として「3密」や「濃厚接触」の回避が呼びかけられる中、人と人との身体的な接触・近接・対面の機会は減り、代わりに遠隔的テクノロジーを用いた「接続」によるコミュニケーションの機会が増えた。大学での教育や学会もオンライン技術を用いた通信によって代替することを余儀なくされた。このような身体的接触から技術による接続への変化は部分的にはコロナ禍の終息後も続くものと考えられ、人と人や人とモノの関係の解体と再構築、再定義をわれわれに迫るものであると言えるだろう。

本シンポジウムはこのような時代背景のもと、身体的接触や通信技術による接続が北米文学の諸作品においてどのように表象されてきたかを探究する。具体的には、ウィリアム・フォークナーの『響きと怒り』、マーガレット・アトウッドの『侍女の物語』、ニコール・クラウスの*Great House*、トマス・ピンチョンの『ブリーディング・エッジ』の4人の作家による4作品を題材として考察を行う。これらの作品の読解を通じて、20世紀前半から現在に至る北米文学における身体的接触と世界、身体と技術の境界面のあり方について考えていきたい。

『響きと怒り』における接続

小林久美子 (京都大学)

『響きと怒り』は、百年ほどまえに書かれた作品である。とうぜん、本作には、「オンライン環境」が創出する「ヴァーチャル・スペース」なる仮想空間の存在は想定されていない。「ポストモダン社会」における「接続」が、テクノロジーの発展により拡大の一途をたどる仮想空間にアクセスすることを指すのであれば、1929年、モダンのさなかに出版された本作において、「接続」はどのような形で提示されるのか。

本発表は、モダニズム文学を代表する本作を取り上げることで、「接続」という言葉の定義を問い直す作業から始めたい。いささか時代錯誤的な試みかもしれないが、現在、「接続」という言葉が、おおむね「インターネット」に結びつけられていることをかんがみると、ネット環境が存在しなかった時代の「接続」の意味合いについて思いを馳せることは、すっかりデジタル化された「接続」という言葉をより多層的に捉えることに通じるはずであるし、ひるがえって、「モダニズム文学における言語表現」という手垢のこびりついたトピックについて今ひとたび考える契機となるかもしれない。

マーガレット・アトウッドの『侍女の物語』における触覚的身体について

高村峰生（関西学院大学）

『侍女の物語』は、主人公オブフレッドの接触への渴望を描き出している。たとえば、マーサと呼ばれる〈女中〉のリタがキッチンで働いている場面では、次のような記述が現れる。「人肌にそっくりな、やわらかくて弾力のあるあの温もりのなかに手を埋めて、リタがパンを作るのを手伝ってもいい。わたしは布や木以外のものに触れたくてたまらない。接触をひたすら渴望している」。また、常に監視をされている彼女は、入浴の際に「自分の髪にふたたび手で触れられるだけでも贅沢なのだ」とも感じる。

性行為がもっとも公的な「問題」と結び付けられた状況で現れる、オブフレッドの接触への渴望は何を意味しているか。本論では、『侍女の物語』（および現在進行中のドラマ化作品）における、主人公オブフレッドの触覚的身体のあり方について考察する。

喪失を型から起こす——*Great House* に見るホロコースト三世の表現

秋元孝文（甲南大学）

ホロコーストという経験を書くことには多重の困難が伴う。言語の限界、共感の不可能性、フィクションとして書くことの妥当性への疑問、そして当事者でない場合はその体験への時間的・空間的距離である。Nicole Krauss (1974-) が *Great House* (2010) でしたことは、このホロコーストという人類史上未曾有の悲劇への直接的「接触」を欠きながらも、そこに「接続」し継承していかねばならないという強い要請を抱えたホロコースト・サバイバー三世の作家による、ホロコーストの描き方のひとつの誠実な例ではないだろうか。語り手が入れ替わる断章で構成され主人公が存在しないこの小説において中心となるのは巨大な机であるが、人ではなく「モノ」が物語の中心に置かれることに着目しつつ、さらなるモノが作品内外の時空を貫き、モノでない何かをいかにして復元しうるのかということを考えてみたい。

9.11 を軽視せよ

——トマス・ピンチョンの『ブリーディング・エッジ』が描くジェントリフィケーションについて

矢倉喬士（西南学院大学）

『ブリーディング・エッジ』は、個人的でドメスティックな描写に終始しがちだった初期 9.11 小説の行き詰まりを打破し、新自由主義経済への批評を組み込むことに成功した 9.11 小説の発展形であるといったように、「9.11 小説」という切り口で論じられることがあった。しかし、そうした試みには無条件に首肯するわけにはいかない。同作品は、9.11 を数ある危機の一つに格下げすることによってテロ行為とそれをめぐる陰謀論が招く監視社会化から距離をとっており、さらに、アメリカ建国以前から続く土地の収奪やその後の都市計画の歴史の一部として 9.11 を再編しているからだ。本発表では、『ブリーディング・エッジ』において、9.11 にはそれ以前と以降を分ける特権的地位が与えられず、むしろ長大なスパンで進行してきた不動産問題、とりわけ、ジェントリフィケーションの一部として再編されていることを分析する。それによって、2001 年より遙か以前から場所を奪われてニューヨークから接触が失われてしまった事物に光を当てると同時に、生身の空間で接触不可能になった事物をヴァーチャル空間において接続可能にする作中の試みが持つ意義を明らかにしたい。